



梅の木と鳥海山 (由利本荘市大琴から) 画: 瀧保 卓雄 氏



令和2年4月1日  
第46号

発行 梅花流師範・詠範の会  
会長 本間雅憲  
題字 初代会長・故 加藤信三師  
編集者 (広報部) 近藤 俊彦  
印刷所 (資) 由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局  
太寧寺 (大田市協和) 伊藤 道人  
TEL 018-896-2029



いのち育み、たゆまずに  
秋田県梅花流師範・詠範の会会長 本間雅憲

年が改まりました。気象庁によると、この年は東北日本海側の日照時間が長く、記録的な「暖冬」となったそうです。今までにこれだけ雪の少ない冬はあったのでしょうか。今後の農作物に影響が無ければいいのですが。そして、新型コロナウイルスのニュースが世界中を駆け巡っています。予測不能の状況が続きますが、早く収束に向かってほしいものです。

『正行御和讃』『正行御詠歌』は、地球環境保全のための「グリーン・プラン」の実践を  
目指して作られました。

山や川、樹木の緑、草花の美しさは、古の昔より今に続いているものです。これを守り伝えることは、私たちの務めと言えるかと思えます。しかし、現実の地球では環境の破壊や汚染が世界各地で拡大し、温暖化が進み、厳しい異常気象となって私たちに襲い掛かってきているように思えてなりません。

今こそ、山川草木、緑を大切に守り、水の功德を想い、感謝の誠をささげ、地球環境を守っていくという誓いを新たにし、お唱えしていきたいものです。

冬ゆきのいのち伝えん春ははな

夏ほととぎす秋はもみじば

「正行御詠歌 (道環)」



# 柴田弘一老師

## 正伝師範補任特集

平成二十九年一月、秋田県梅花流の先達・柴田弘一先生が正伝師範に補任されました。柴田先生御本人、また、深い絆と友情で結ばれた齋藤老師、大徳老師からもこの度特別にご寄稿いただきました。

※本来であればもっと早い段階で取り上げるべき記事でしたが、編集側の都合で今回の掲載となりましたこと、関係者の皆様にお詫び申し上げます。



秋田市・東泉寺住職

柴田弘一

### 出会いに感謝

私が大本山永平寺に安居した昭和四十二年の春、永平寺法堂に於いて「梅花流創立十五周年記念大会」が開催された時の事が鮮烈に記憶に残っています。その事がきっかけで宗門に梅花流があることを知ったのですが、大会の後、間もなく殿司の逸見老師（梅花流師範）の呼びかけで山内での梅花流のお稽古日を持たれ、私も参加。稽古を重ねて安居中に助教に補任されました。あれからもう五十二年が経ちました。

時が移り、昭和五十三年一月、宗務庁からの案内で突如研修道場に集められた師範十名に加わり、年齢も教階もまちまちでしたが、研修員として頑張つて欲しい旨。す



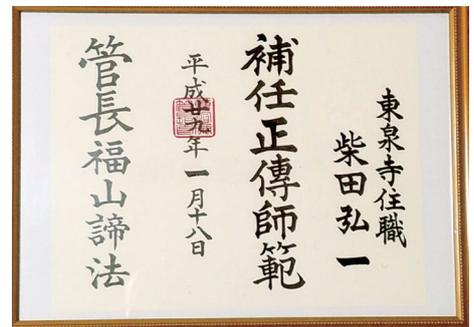
祝賀会の様子

(平成29年4月4日・秋田キャッスルホテルにて)

ぐに「十人会」と命名し、本庁講習会の他に、

永田正道先生（正伝師範）を講師にお願いしての自主研修会の集まりは、会の皆と出会う事が一番の楽しみでありました。先生の研修は厳しく且つ濃密な内容で、充実の時間でもありました。その中で培われたメンバーの絆は強く結びつき、心を許せる友となつて今にあることを、心から感謝しています。

ところで、先般図らずも「正伝師範」に補任いただきました事は、身に余る光栄に存じております。今日まで梅花を通じて様々な経験をさせていただき、また沢山の方々に良き縁をいただいた事にも改めて感謝の思いでおります。この補任は、梅花をしつかりと伝えよとの励ましであろうと思つております。若手の師範・詠範も増えつつありますので、もう少しの間頑張ろうかと思つている昨今です。



山形県鶴岡市・總持寺住職

齋藤裕道

### 盟友の正伝師範補任を祝う

令和元年十一月八日は、詠道の師・人生の師と敬慕する永田正道先生（正伝師範、梅花講審議会委員等）十三回忌の御命日でありました。

良く晴れた秋の日、柴田弘一師、大徳道賢師（北海道）と共に、静岡県伊豆半島の光月院様にお詣りをしました。永田先生作曲の「誓願御和讃」を一行十二名で唱えると、斯道発展に心血を注がれた往時の面影が在ますが如く彷彿としました。歓談の翌日、同期の岡田達夫師と山田義徹師の墓参も叶い安堵しました。

四十余年前、梅花流研鑽を目的に十名の  
研修員が宗務庁に招集されたのが、柴田先  
生との出会いでありました。

「今更此のオレに何を教えようって言うん  
だ！」と北海道から意気込んで出て来た大  
徳さんが、ケチヨンケチヨンに指摘される  
姿は滑稽でした。柴田さんと私は実に劣等  
生でありました。ホント！ 以後、彼は伸  
びました。

朗々とした爽やかな声、理論に基づいた  
施揺、何方にも笑顔で接する柴田先生は今、  
梅花講審議会委員、検定委員等として永田  
先生と同じ道を歩んでおられます。

三年前、正伝師範に任せられると、お独りで永田先生の墓前に感謝の報  
告をなされたことからもお人柄を見ることができます。  
盟友の慶事は、勿論私の慶事でもありません。



### 柴田弘一師、 正伝師範補任に寄せて

北海道山越郡長万部町・大慈寺住職

大徳道賢

柴田弘一師正伝師範補任の朗報に接した時、梅花流は正しく受け継がれ  
てゆく、という安心を覚ええました。梅花流を築いてこられた先人達に誰よ  
りも敬意の念深い柴田師。そして常に未来にも目を向けている柴田師。今  
までの流れを尊重しながら、更に新しい風を吹き込んでくださるであろう  
柴田師範の正伝補任に心から祝意を表します。

私が柴田師と最初に出会ったのは昭和五十三年。宗務庁主催研修員講習会



永田先生の墓参を終えて(伊豆市・光月院様にて)

の折でした。昨今の研修員は、基本的な詠唱作法の出来上がったレベルの高  
い師範の集まりですが、私達はほとんどの曲が未修得。十名だったので講習  
は円座。自分の番までに少しでも曲を覚える為には、最初に当てられないよ  
う座る場所選びに戦々恐々だったあの頃を懐かしく思い出します。でも、梅  
花の魅力に火がついてからは、全国各地で自主研修会を続けてきました。い  
つの間にか深い絆を結ばせていた、ありがたい事、ありがたく思っています。

以前、柴田師のご自坊・東泉寺様で落慶法要があり、私が祝辞を述べる事  
になりました。檀信徒へのウケ狙いで「柴田さんと最初に会った時、きりたん  
ぼみたいなのと思いました」と言ったら、少しウケたので気を良くしていま  
したが、後に失礼な事を言ったと反省しました。でも考えると、反省するとい  
事は本物のきりたんぼに失礼な事。そして更に思いました。やっぱり柴田師  
はきりたんぼみたいだと。そうです。きりたんぼ鍋の主役はきりたんぼ。し  
かし、きりたんぼは自分の味を主張せず、周りの具材  
やダシと見事調和して一つの世界を作り上げてゆく。  
正に和合の姿。柴田師は、その実力に裏打ちされたき  
め細やかな指導力と決して高慢にならない人柄。導く  
人と学ぶ人の心が一つになる世界を自然に作ってゆく  
達人です。きりたんぼ鍋のように(少ししつこいかな)。  
益々のご活躍を祈ります。



### 『誓願御和讃』

作詞・赤松月船 / 作曲・永田正道

- (一) 顕れざれども隠れなき 本来そなわる道のある
- (二) 覚りて深きに届くほど 足らわぬ日々の嘆かるる
- (三) 広きは教法の門にして 強きは分け入るころろざし
- (四) 人にも世にも光明よ 照らしてあまねく満ちわたれ

「仏道を志し、仏教を信じる者として最初に心がける四つの誓い」  
「四弘誓願文」を基に歌詞が作られています。

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景

へその二十四 大聖釈迦如来成道御詠歌

# 十方世界が光明をこころみよむる

大聖釈迦如来成道御詠歌

明けの星仰ぐ心は人の世の

光となりて天地にみつ

作詞 久我尚寛

## ◇ 成道会 ◇

「三仏忌(さんぶつぎとも)」という言葉をも存じますか。お釈迦様のご生涯の中で大切な次の三つの日のことを言います。

誕生(お生まれ) 四月 八日

成道(おさと) 十二月 八日

涅槃(おなくなり) 二月十五日

それぞれのときに行われる降誕会(花祭り)とも・成道会・涅槃会は仏教徒にとって大切な三大法要です。みなさんも、お寺で行われるいずれかの法要にお参りされたことがあるでしょう。

この三仏忌、今では仏教各宗で行なっているものですが、このうち成道会を初めて日本に伝えたのは道元禅師だったそうです。そのことは道元禅師ご自身が、永平寺の法堂で行った説

法の記録に次のようにあることよってわかります。

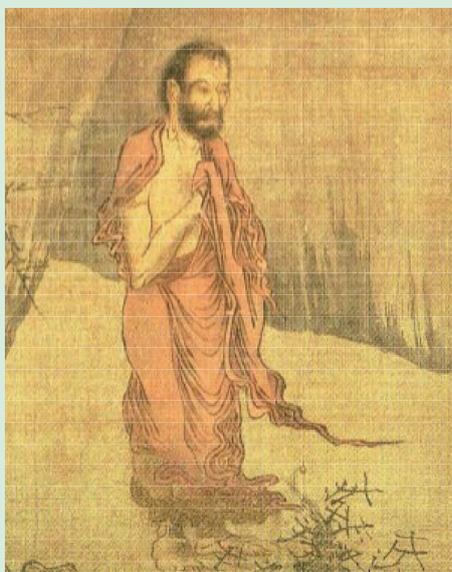
臘八上堂。日本国の先代、かつて仏生会・仏涅槃会を伝う。しかれどもいまだかつて仏成道会を伝え行ぜず。永平初めて伝え、すでに二十年なり。今より已後、尽未来際伝えて行ぜん。(永平広録・巻五)

(訳文)  
十二月八日の上堂。日本の国ではすでに釈迦の降誕会や涅槃会を伝えてはいる。しかしいまだかつて成道会を伝えそして行じていない。そこで永平寺住職である私(道元)が、初めてこの国へ伝えてすでに二〇年になった。今から後も未来永劫に伝え、行じていこう。

臘八というのは臘月の八日、つまり十二月八日のことです。お釈迦様の伝記によれば、皇太子の位を捨ててお城を出たお釈迦様は、六年間の言語を絶する修行の末に、身体をさいなむ苦行には結局益のないことを知って修行していた山を下ります。そして山すその村の河で沐浴し、村

の娘から乳粥の供養を受け、そばにあった樹のもとで七日間の坐禅をし続け、その瞑想の果てに十二月八日の未明、暁の明星を見て自分のおさとりを確信しました。このことを「成道」と言います。

修行道場ではこのお釈迦様の坐禅からおさとりまでを追慕するために「臘八摂心」という修行が行われます。十二月一日から始めて七日の深夜まで、毎日早朝から夜間に及ぶ坐禅修行をするのです。この期間は、いつも法堂や仏殿で行われる読経もすべて僧堂で坐禅したまま行います。三度の食事も坐禅のまま、坐禅と坐禅の間の休憩時間に洗面や大小の用足しをします。そして八日に日付が変わる頃、修行僧たちは法堂へ上り、苦行の山を出て来た時のお釈迦様の姿を描いた「出山釈迦像」を本尊として掲げた道場で成道会を行うのです。



出山釈迦像

この始まりが道元禪師によって伝えられたと云うことは、私たちにとつても大事な意味があります。まさに「今より已後、尽末来際伝えて行ぜん」という気持ちで成道会を大切にしていきたいものです。

◇ 満ちわたる光明 ◇

さてこの説法に続いて道元禪師は次のような言葉を述べています。

まさにそのとき、永平門下、しばらくいかんがいわん。梅花、雪裡に一枝開く。春風の次第に吹くことを仮らず。大衆、この道理を委悉せんとなすや。良久して云く、十方世界、光明をこうむり、一切衆生、仏説を聞く。拄杖と袈裟、ともに笑欣し、僧堂、仏殿、鉢盂悦ぶ。

(訳文)

まさにこの時、永平寺における修行者たちはどのように言葉に表すべきだろうか。(まずは私が言ってみよう)「梅花が雪の中に一枝花開いた。それは春風がだんだんと吹いてくる力など必要としないのだ」と。さて修行者たちよ、この意味をくわしく知りたいと思うか。(ややあって次のように言われた)

「釈尊の成道によつて」あらゆる世界は光明をこうむり、すべての衆生は釈尊の言葉を聞くことができた。拄杖も袈裟もともに笑って喜び、僧堂も仏殿も食器さえもみな悦んでいる」。



成道の後をはじめの説法：初転法輪

まず道元禪師は、お釈迦様の成道を、雪中に梅花が開いたことにたとえます。これはもとは達磨大師のお師匠様である般若多羅尊者の「花開いて世界起こる」という言葉を踏まえたものです。その意味は、一つの花が開いたことによつて、無数の他の花々が開き、世界に春が訪れるというもので、一つの真実に目覚めることが、すべてのおさとりに至るきつかけとなり、これまで見てきた世界が新しく生まれかわるといふことを示したものでした。道元禪師はこの花を、春風の力を借りずに花開いた梅の花であると言つたのです。そしてこの「梅花、雪裡に一枝開く」という言葉は道元禪師のご本師・如浄禪師も好んでお使いになつていた言葉でした。

次に修行僧たちに呼びかけたあと、またご自身で語つたのは、お釈迦様の成道は、一つの光がそこに生まれて、やがて世界中に光が満ちわたつてゆくように、すべての人々にお釈迦様の言葉、すなわち仏教の教えが広まつてゆく、と言われたのです。それゆえ、有情(心のはたらきある人々)だけでなく、無情(心のはたらきのない)であるはずの袈裟・仏具や建物まで、仏の教えの恩恵に浴していることを心から喜んで、というのです。この「花開いて世界起こる」という言葉を、道元禪師はとても好まれたようで、道元禪師の著作の中で何度も目にすることが出来ます。しかもその花は道元禪師の場合、いつでも「梅花」なのです。こうしてお釈迦様の成道を梅花と光明にたとえた道元禪師のお説法を踏まえた上で、梅花流詠讃歌の「大聖釈迦如来成道御詠歌」を考えてみましょう。

「明けの星仰ぐ心」とは、暁の明星を仰ぎ見ておさとりを確信したお釈迦様の心、またお釈迦さまの教えを受けとめてよいでしょう。それが「人の世の光となりて天地に満つ」、つまり世の人々の心の闇を照らす光となつて、天地いっぱいになり満ちてゆくという意味です。これは先ほどの道元禪師の「十方世界、光明をこうむる」という言葉とまったく重なるものと言えるでしょう。

もう一つ、道元禪師の言い方をお借りすると、お釈迦様のおさとりによつて、一枝の花が開花し、それに誘われるようにすべての花がいつせいに花開いて、この世に春が訪れる。まさに「花開いて世界起こる」ことが成道だと言えるのです。

チン・ト・リン・凛  
 おらほの梅花講  
 梅花に夢中！  
 ※秋田弁：  
 おらほ＝私の住んでいるところ



金嶺山 龍源寺

住所：由利本荘市矢島町城内田屋の下二十六  
 設立年：平成三年（間もなく三十周年！）  
 講長：土屋 眞雄（龍源寺東堂）  
 講員：二十人（現在）



由利本荘市・  
 龍源寺梅花講員  
 佐藤 るり子

大晦日の夜、十一時三十分。肌寒い本堂の温かい緋毛氈の上に、正装して着座した私達講員。開け放たれた入り口から、ほの甘い香りが冷たい風に乗って入ってきます。それは、参拝者にかかるまわれる東堂様の奥さま手作りの甘酒の香り。今日は年一度の越年大般若奉詠が行われます。一同気を引き締め「開経偈」、「三宝御和讃」と続きます。そして、住職様の力強くも清涼な大般若の読経が本堂に響き渡ります。私達は心静かに十曲ほどの御詠歌をお唱えしますが、外からの参詣者の撞く鐘の音が優しく私達に寄り添う



大晦日の境内

きをし、身も心も温まり満たされて家路につきます。

年間数多くの行事はありますが、毎年新しい発見、感動する機会もあります。楽しく、正しい教えに努めてくださる円通寺先生。細かい心配りで私達を導いてくださる講長の東堂様、住職様には心から感謝しております。

龍源寺梅花講の起ち上げから二十九年目となりました。五年毎に行われる記念行事として、来年は京都にある矢島藩主・生駒家所縁の寺院での奉詠と祇園祭りの観光を予定しております。毎回、東堂様の御縁の恩恵に与かり、大本山總

持寺、清水寺内陣での奉詠等々素晴らしい経験を重ねてまいりました。その御恩に報いるべく、私達も益々精進努力してまいりたいと思います。当寺に二回程訪れ、ご法話いただいた青山俊董（あおやましゅんどう）ご老師様の著書の中の、「明日死ぬかのように生き、永遠に生きるかのように学ぶ」を心にとどめて。



住職様と共に



龍源寺梅花講員さん



参詣者

# チョットぶじょほう

## 第22期梅花流師範養成所レポート

東京都港区芝にある曹洞宗宗務庁では、二年毎に梅花流師範養成所を設置し、熱意ある若手師範を育成しています。四泊五日の講習を二年間で六回重ね、朝から晩まで梅花漬けの日々。今回、第二十二期養成所を無事終了したお三方に感想を寄せていただきました。

### 同行同修の道をゆく



能代市・  
倫勝寺副住職  
山田卓爾

平成二十九年から二年間、宗務庁で行われている梅花流師範養成所で、第二十二期生として勉強する機会を頂戴してから早一年が過ぎようとしています。気が付けば、いつの間にか房の色が白くなっているではありませんか。これまで房が水色だった時は、出来ていなくてもしようがないと自分に甘える免罪符のように思っていました。もうその手は使えなくなっていました。

最近では師寮寺での梅花講以外にも講習を受け持つ機会や、奉詠大会など人前でお唱えをする機会を多少なりとも頂戴す



山田師範・自坊での講習の様子

るようになりまして。元々、小心者で緊張しいの私にとっては荷が重い事この上なく、毎回打ちのめされては反省するばかりです。

いつまで経つても出来るようにならない私にとって、梅花流詠歌はずっと長い冬の中にいるようです。しかし、これまでご縁をいただいた先生方や仲間達、檀信徒講師さんの存在が梅の花のように感じられる今日この頃。そんな皆様と共に歩ませていただくことで、いつかは私自身も春を感じ、また聞いて下さる方に少しでもあたたかい気持ちになっていただけるようなお唱えを目指し、精進して参ります。今後ともご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

※同行同修：志を同じくする仲間と、共に仏教の教えを学び、励まし合いながら修行を続けていくこと

### 想いを伝えるということ



横手市・  
天仙寺副住職  
福田皓雄

第二十二期梅花流師範養成所に通わせていただいたことは、私にとって限りなくありがたい経験でありました。大変ではありましたが、梅



福田師範・養成所同期の仲間たちと

花の事だけを考えた。ただひたすら梅花と向き合う時間をいただいた。それはとても幸せなことだと噛み締めながら養成所生活を送らせていただきました。

梅花を習い始めた頃「梅花と向き合うことが幸せ」という考えになるうとは思いません

でした。何がわからないかもわからない、ただ目の前の事に追われ、それをこなしていくのがやっとでした。幸せを感じられるようになったのも、秋田県内の先生方、先輩方のおかげでございます。誠にありがとうございます。

養成所で一番学んだこと、それは心を伝えるということでした。養成所中、ハンセン病の事を学び、その後、慰霊碑の前でお唱えさせていただいたことです。技術はないお唱えではありませんが、想いを伝えたいと思ったのはこの時が初めてでした。技術も大事ですが、それだけじゃないんだよ、と講師先生方にお示をいただいたのだと思いました。

そして、二年間共に学んだ仲間たちとの最終日。この先忘れることはないでしょう。一緒に頑張ろう。元気でいてね。の想いを伝えあつたあの「同行御和讃」を。



# 梅花インフォメーション

## 令和元年度 梅花流秋田県奉詠大会 開催報告



「令月にして風和らぎ梅花咲き誇る」のテーマのもと、十月二日、梅花流秋田県奉詠大会が、初めて男鹿市民文化会館を会場に開催されました。

稲刈りの時期と重なってしまつたこともあり、昨年よりも講員数が百名ほど少ない中での開催となりまして、この日のために各教区各講の梅花講員さん達は、登壇曲習得の練習に励まれたことを思う存分発揮された、まさに梅花が男鹿の地に満開となつた大会でした。

登壇後の清興では、地元男鹿市のなまはげ太鼓が演奏され、この日の参加者一同の疲れを吹っ飛ばしてくれるような、爽やかに豪快なパフォーマンスに酔いしれました。

来年の県大会は、秋田県梅花流六十五周年記念大会としての開催が予定されており、梅花講員の人口減少が叫ばれて久しい昨今ですが、記念大会に相応しい清興も鋭意選定中ですので、沢山の関係御寺院様、梅花講員様にご参加いただけますよう、この誌面をお借り致しましてお願い申し上げます。

(梅花主事・中村 卓道 記)



## 表紙について

今号の表紙は、由利本荘市西目町在住の画家・<sup>かほな たかお</sup> 湯保卓雄さんによる作品です。編集者も地元の名峰・鳥海山を愛するものとして以前からファンで、表紙選定に際し、湯保さんに梅の花を題材にした作品の提供をお願いできないか打診したところ、快諾いただき掲載が実現した次第です。

湯保さんは、鳥海山を眺望できる県内各地点から描いた「鳥海山方位360度カレンダー」を毎年発行し、定期的に西目町や秋田市等で個展を開催するなど精力的に活動されています。

◆ 湯保卓雄さんホームページはこちら

<http://takuart1951.com>



## 令和二年度 梅花流全国奉詠大会中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、五月に北海道札幌市の真駒内セキスイハイムアイスアリーナで開催を予定していた、令和二年度梅花流全国奉詠大会は中止となりました。

【お問合せ先】曹洞宗務庁 伝道部詠道課  
電話 03-13454154 16 (直通)  
ファクス 03-13454176 99

## 編集後記

今号は、巻頭見開きで柴田先生正伝師範補任特集を組ませていただきました。記事としては掲載時機を逸した感はありませんが、秋田県梅花流の歴史のひとコマとして祝意をもって誌面に刻み、県内梅花流を導いてくださった長年の功労に敬意と感謝の気持ちを表したいと思えます。そして、今後ともご指導のほど何卒宜しくお願い致します。

私が初めて柴田先生から教えていただいた曲は『浄心』。流麗で美しい旋律に聴き惚れつつも、自分ができること続かない声と掴めない音程にあつさり挫折した記憶があります。紆余曲折を経て、今では数ある梅花の曲の中でも上位に入るお気に入り曲です。

読者の皆さんは、梅花流詠歌のどの曲に思い入れや思い出がありますか？今度ぜひ教えてください。また、同行誌面に関するご意見や要望、ご感想等もお気軽にどうぞお寄せください。

(俊彦)

## 感謝

第四十六号発行にあたり、お忙しい中ご寄稿いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。